平成 30 年度　飼育展示コース　実習生レポート

私がこの実習を通して学びたいと考えていたことは二つあります。
一つ目は、動物の魅力が来園者に伝わる展示をするためにはどのような工夫をしているのかです。私の配属先の両生類爬虫類館では、飼育員が展示のレイアウトを考えたり変えたりしている場面を見ることがありました。飼育だけでなく、展示の中に動物と一緒に入れる植物や床材や石などのレイアウトも飼育員が考え、それぞれの動物の生息地にあるようなものを使い、来園者により野生本来の姿を見てもらえるようにするそうです。また、一つのテーマに沿って様々な動物を展示する特設展もありました。この展示はストーリー性があり、さらに観察のポイントが絞られていて、映像を使った説明もあるため、動物の特性が良く伝わるし、観察したい・知りたいという意欲が駆り立てられるなと思いました。
担当飼育員が来園者に動物の説明をする、キーパーズトークというイベントの見学もさせてもらいました。いつもその動物を見ている飼育員からの貴重な話が聞け、動物も通常の展示より近くで見ることができるので、興味深そうに集中して参加している来園者が多かったです。説明を聞いて疑問を持ったときすぐに聞いて解決できるのも、このイベントのよいところだと思ったし、質問に的確に丁寧に対応できる飼育員は、その動物について知識をもち、きちんと理解しているのだなと思いました。このように、毎日観察や飼育をしたり前の担当飼育員たちの経験を共有したりして、それぞれの動物や個体について理解のある飼育だからこそできる工夫をいくつも見ることができました。
二つ目は、繁殖や保存の成功のために努力していることについてです。繁殖をさせるためには、まず、その動物にとって落ち着ける良い環境を作らなければいけません。飼育スペースに糞や尿があれば取り除き、残餌回収や飲み水のこまめな交換をして、清潔にすること、飼育スペース内の温度と湿度の調節、採食や排泄や体調の様子の記録など、基本的なことを怠らないで徹底することが大切だと思いました。

飼育や展示や繁殖がうまくいくためには、動物への理解や知ろうとすることが大事だとわかりました。大学の講義や実習で疑問に思ったことがあったら、そのままにしておくのではなくて、先生に聞いたり自分で調べたりして解決していきたいです。実習など、直接動物と関わるときは、作業に集中するだけでなく、動物の動きや様子を観察して変化に気づくことのできる人になりたいです。また、職員同士の毎日のミーティングや他の実習生との話し合いを通して、コミュニケーションをとって情報や意見を共有することは自分だけでは考えつかなかった視点からの見方を発見できるから、とてもためになりました。自分一人で考え

られることは限られているから、これは飼育の現場だけでなく、日常生活の中でも重要なことだと改めて思うことができました。

飼育は、今までの記録と経験をもとに行っていて、こうしなければいけないというマニュアルがあるわけではないから、飼育員同士が話し合ったり、他園と情報を共有したり、生息地に実際に行ったりと、試行錯誤しており変化していくものだから、言われたことをやるだけでなく考える力が必要だと感じました。飼育員の方たちは、それぞれ考えや情熱を持っていて妥協をしない姿に憧れました。
また、実習生同士でコミュニケーションをとることによって、とても刺激を受けました。学芸員実習の方や獣医臨床実習の方はもちろん、飼育展示実習の方たちの間でも、実習を通して学びたいことや質問の内容が異なっていました。様々な考えや意見を聞いて、自分一人だけでは視野の狭い考え方になってしまうと気づくことができました。
毎日が新鮮で、貴重な発見と収穫の多い 2 週間でした。参加することができて本当に良かったです。上野動物園だけでなく他園の様子も見て、飼育・展示方法や設備や力を入れている取り組みなどの違いを比較してみたいと思うようになりました。大学での勉強も、しっかりとした考えと目標を持ってがんばります。

平成 30 年度　獣医臨床コース　実習生レポート

＜実習目的＞

私が今回の実習を希望した目的として、①日本を代表する動物園であり、多種の動物を飼育する上野動物園での獣医療や動物の健康維持・疾病予防の取り組みを実際に見学する、②大学で繁殖学を専門に学んでおり、希少種保存や個体数制限の取り組みを見学する、③以前より、獣医学だけでなく来園者への教育・普及にも興味があり、それに関連した取り組みを動物園の内側から見学する、の 3 点を設定した。

＜実習内容＞

実習では最初に病院内の動物たちの状態を確認しながら掃除、給餌、投薬や補液などの処置が施された。処置後は動物園内の各飼育施設において動物の健康状態を飼育員の方と話して確認した。その際、飼育担当者は入院している動物の状況を知らされたり、自分の疑問点を獣医師に聞いたりすることで獣医師と飼育担当者の間で情報を共有し、飼育作業効率向上と動物が健康的に長生きできる飼育環境の両方を改善できるよう飼育方法を検討していた。

健康状態を知る必要がある動物は体調不良の原因精査や健康状態を確認した。上野動物園には高水準の医療設備環境が準備され、診療が実施されていた。たとえば CT の使用は、それまでエコー検査やレントゲン検査で得ていた体内の異常をより詳細に、より正確に把握できるようになり、治療法検討に有効であるほか検査時間が短縮でき、保定や麻酔時間を短く動物に対するストレス軽減にも有効であるとのことだった。

また、様々な動物でのハズバンダリートレーニングを見学した。たとえば、ジャイアントパンダやアジアゾウ、クロサイでは定期的な採血によって繁殖適期の予測を行い、在来馬やホッキョクグマなども必要なときに検査が安全にストレスなく行えるようハズバンダリートレーニングの練習を重ねていた。

生きた動物を相手にするだけでなく、死亡個体の解剖により死因を調べ、飼育員と獣医師が今後の飼育に活かすよう協議を行っていることが印象的だった。

今回の実習期間は「真夏の夜の動物園」に重なっており、実習後に動物園内を回ることができた。そこでは様々なイベントが行われ、来園者に対して野生のゾウがおかれている問題を伝えるイベントを実施していたり、来園者に配布する内輪にジャイアントパンダの野生での状況を伝える内容を記されていたり、多くの方法を通じて来園者への動物の状況や、それに対する動物園の活動を伝える試みがなされている様子を感じられた。

＜実習で感じたこと＞

実習では最初に挙げた 3 つの目的に触れることができた。①「上野動物園での治療や疾病予防について見て学ぶ」については 10 日間、獣医師の先生方についてまわる中で病気予防のための駆虫薬投与や健康診断、病気の動物の検査・治療の様子を見学できた。②「希少種保存や個体数制限の取り組みを見学する」は飼育の方々と獣医師の先生方が協働して繁殖適期の予測や育雛方法の検討など種の保存に向けた取り組みを行っている様子や、反対に過剰な個体数の増加を防ぐ方法をワオキツネザルなどで検討する様子も伺うことができた。そして、③「来園者への教育・普及に関連した取組を見学する」では、実習期間内に医療センターが来園者に向けて直接、働きかけをすることはなかったが、真夏の夜の動物園での情報発信は、動物の置かれた厳しい状況を子どもたちにも分かりやすく伝えようとするイベントであったと感じた。時折、獣医師から飼育員へ話をする機会もあり、教育や普及に向けた活動を積み重ねている様子を知ることができた。

次に他の動物園での獣医学実習と比較して上野動物園で特徴的だと感じたことを以下に記す。

まず、個体管理・疾病予防の徹底である。予防接種や駆虫薬投与を定期的に行う、動物 1 個体ごとにカルテがある、踏み込み槽の設置と使用の徹底などを丁寧に実施することで動物が病気になるのを防ぎ、仮に病気になってもそれが蔓延しないように努めていた。

次に印象的だったのは獣医師も飼育員も、全員が動物に対する知識が深く、かつ勉強熱心であることである。全員が動物のことを大切に思い、良い健康状態で動物本来の行動が展示できるように趣向を凝らした給餌やアスレチックの設置を行い、獣医師にも飼育方法を相談する様子が印象に残っている。

しかし、多くの動物がいる動物園こその問題として、老齢や奇形、ケガや病気によって、今後展示される見込みのない多くの個体がバックヤードで飼育されていた。元来の動物園は博物館として誕生し、正常個体を展示することが前提であったが、動物福祉や愛護の考え方、人社会での障がい者福祉の考えも進み、老齢や奇形、病気を理由に動物を展示しない、という考え時代の流れにそぐわないようにも思え、そういった個体を展示するか否かは難しい問題であると感じた。どうするべきか私自身の結論はまだ出せないが、じっくりと考えていきたい。

また上野動物園だけでなく、他のどの動物園においても動物園動物に対する獣医学は未熟で、正常な状態や病気時の効果的な治療や薬用量が分からないことも多くある。これらを解決するには多くの書籍に目を通し、獣医師が知識を深めていくことは重要であるが、それと

同時に飼育担当者が日々飼育の現場で観察している行動や特性を聞くことも、動物たちの健康を維持するのに重要であると感じた。

＜今後活かしていきたいこと＞

動物園動物の体調不良において、原因を特定し、治療を行い、治癒させることの難しさを今回実感した。治療法がまだまだ確立していないこの分野においては病気を治すことと同じくらいに飼育管理によって病気を予防すること、早期発見することが大切で、そのためにも今後、各動物の特性や適切な飼育方法を学んでいこうと考えた。

動物園の持つ 4 つの役割「種の保存、調査・研究、教育、レクリエーション」のバランスをうまく保ちながら来園者、動物園職員、動物園動物の 3 者すべてが幸せであるような飼育方法や獣医療、動物のあり方を考え、改善に努めていくことが、動物園が研究施設として、教育施設として、娯楽施設として今後も存在し続けていくために必要であると感じた。将来動物園に携わりたいと考えている者として、動物園がこれからどのように振舞っていくのが良いか、現場で見聞きしたことやグループワークで意見交換したことを参考にしながら考えを深めていきたい。

＜謝辞＞

末筆ながら、実習で大変にお世話になりました医療センターの先生方、飼育展示係や教育普及係の方々を始めとする上野動物園職員のみなさま、同時期に実習を受けた実習生 8 名に厚くお礼申し上げます。

平成 30 年度　博物館実習コース　実習生レポート

大学の授業で「学芸員は別名：雑芸員」で、博物館資料の収集・保管以外に館内の老朽化した所の補修作業や事務仕事に追われるというお話を聞いていました。そのため、今回の実習は動物解説員の方のガイドやドーセントグループのスポットガイドを見学した後は、ずっと事務所内での事務作業と標本の整理を行うと考えていました。しかし、実際には子ども動物園すてっぷ館でのふれあいプログラムや障がい児サマースクール、サマースクール５，６年生クラスのサポートをさせて頂いたりと幅広く数多くのプログラムを経験させていただきました。

来園者の視点以外に職員としての視点、ボランティアとしての視点を知ることができ、本当に良かったと思います。加えて、盲児の学生や小学生が教育内容をどの程度理解できるのかを実際に知ることができたことも良かったと思います。

実習前、私は「動物園での生きている動物を通しての教育普及活動と標本を通しての教育普及活動の両方を学びたい」と考えていました。しかし、実際には上野動物園は『生きている動物の観察』を一番に考え、その観察を妨げないようにしつつ、より観察したいと思わせるような教育プログラムを企画・実施していることを知りました。剥製は来園者の興味・関心を引き出すことができる一方、その剥製を見ている間生きている動物は見ないという問題があることに実習前は全く気づきませんでした。剥製を見せるだけでは博物館になり、動物園としての良さを全く活かせていない甘い考えだったと思います。動物園の博物館資料としてある剥製や頭骨標本は教員セミナーや障がい児サマースクールのような観察では知ることができないことを学ぶ際に利用する形で、適材適所で使い分けることが良いと学びました。

また、今回サマースクールのお手伝いをさせていただいたことで、そのイベント時の天候以外に参加者が会場に来るまでの安全性や公共交通機関の状況など、イベント開催時間以外の時間についても考慮することも学びました。将来、企画実行側になった際には、その企画を実施している時間帯だけでなく、前後の時間帯についても注意した上で企画を実施するようにしたいと思います。

加えて、企画を実施したその日に反省会を行うことで翌日に反省点を活かすことができ、翌日をよりよいプログラムにすることができることを学びました。今後、企画を実施した際にはその日のうちに反省会をしたいと思います。

障がい児サマースクール終了後の反省会で、このプログラムが「子どもたちと動物とのふれあいの場であるとともに盲学校同士の交流の場である」ということを知りました。私が企画するイベントも、学び以外の付加価値がつくようなイベントを企画したいと思いました。学芸員として仕事に就くことができなかったとしても、今回の実習で得た知識・経験を今後に積極的に活かしたいと思います。小学校５・６年生、盲児、3 歳未満、おとなの方、外国の方と様々な来園者の方について知ることができ、本当に貴重な経験ができたと思います。上野動物園で学芸員実習ができて本当に良かったと思います。10 日間のご指導、ありがとうございました。